



巻頭言

DX時代の図書館の役割

校長 近藤科江

小中学生のころは、毎日のように図書館に通い、友達と競うように本を読んでいた。高校になると、読書の時間がずいぶん短くなって、長い休みがないと図書館に行くことも少なくなりました。「学校読書調査」(全国学校図書館協議会)の結果でも、小学生12～13冊/月に対して、中学生4～5冊/月、高校生2冊未満/月の平均読書数という状況で、年齢とともに読書数も減っています。デジタル世代の「読書離れ」が影響しているのでしょうか。

スマートホン保有率(「令和2年通信利用動向調査/世帯構成員編」総務省)は、小学生の45.3%、中高生の93.1%になっており、10代のSNS利用率は93%、YouTube利用率は96%を超えています。近頃は、直感的に理解できる画像や短いフレーズによる情報がスマートホンなどデジタル機器から溢れています。若い世代は、長い文章を読んだり、言葉の意味を深く考えたりする習慣が無くなり、読書の時間がスマートホンに奪われている印象を受けます。しかし、先の調査結果では、読書数はいずれの年代でも緩やかながら増えています。高校生世代で、2冊/月はやや少ない気もしますが、若い世代の読書数が増える傾向にあることは、意外に感じるとともに、何か救われた気がします。

私が研究を始めた当初は、論文を読むために図書館に入り浸っていました。何時間も図書館に籠り、論文を読み、必要な論文を借りてはせっせと研究室に運びコピーするという毎日を送っていました。しかし、電子ジャーナルが普及し始めてから、図書館に通う事も無くなりました。読みたい論文や単行本を見つけたら、目の前のパソコンで検索して、クリック一つですぐに読むことができます。その便利さを一度味わうと、図書館で本を探したり、借りたりすることは無くなりました。最近、紙印刷で発行される学術誌は激減しています。それは単行本や漫画本、新聞に至るまで、紙媒体の情報がデジタル化されている現状と同様です。本が消える未来、ハコモノである図書館が教育機関から無くなる未来は、着実に近づいています。実際、利用者の減少と経費削減の観点から、「図書館不要論」が論じられています。図書館の役割を考える時が来ているのです。

前職では、図書館長を兼務していたこともあり、図書館の役割について考える機会がありました。「図書館が好き」という学生も少なからずおり、図書館サポーターとして活動していました。そんな学生を中心に、図書館の利用率を上げる取り組みを地道に行うなかで、学生はSNSや動画を使ったアピール活動を率先して行っていました。Z世代には、やはりインターネットを介した活動は不可避のようです。一方で、図書館スタッフは、本の整理にあたっていました。蔵書の確認をする傍らで、保管する必要がなくなった本の処分を進めていました。紙でしか発行されていない論文や単行本もPDF化され、デジタル保管されて、どこからでもアクセスできる状態に移行しつつあります。

DX時代の図書館の役割は大きく様変わりし、蔵書保管、図書貸し出しや閲覧はバーチャル空間での業務となります。現実空間としての図書館は、蔵書のスペースが削減され、自習室やオンラインミーティングができる個室が整備されたりして、「過ごしやすさ」や「癒し」を感じる空間として活用され、職場や学び舎における「自分の居場所」「交流する場」としての役割を担うことになるのかもしれませんが。

